

ケタ違いに異なる背景

「2010年で世界は様変わりしている。ICT(情報通信技術)の進展により、情報は瞬時に世界を駆け巡る。個人も組織も相互につながる手段ができて、世界レベルでネットワーク化が進んでいる。世界中の情報を体系化し、検索サービスを提供するグーグルなどの企業も出現して、情報自体はコモディティ化している。」

こうした動きのなか、今や知識経済を超え、新しいコンセプトをつくりあげる力や概念化の能力が企業や国の力を決める「コンセプト経済」が進行中であるという話も聞かれる。

では、従来と比べて一変しているある時代を果敢に乗り切っている人材に必要な能力とは何か。私は次の3点を思う。

①数々の情報を組み合わせ、そのウミをとりながら、自分の判断材料としてまとめあげる力

②それを誰にでもわかりやすく表現し、意見の違つ人とも議論しながら

グローバルICT時代の人材開発

i.'s eye



一橋大学大学院 国際企業戦略研究科教授
石倉 洋子

「いしくら・ようこ」
ハーバード大学大学院経営学博士(DBA)修了。1985年からマッキンゼー社でマネージャ。92年青山学院大学国際政治経済学部教授、2000年から現職。商船三井社外取締役などを務めている。著書に『世界に『世界経済新報』(共著、東洋経済新報社)、『日本の産業クラスター戦略』(共著、有斐閣)など。

③自ら率先してそのマイナマを売り、より良いマイナマをつくりあげる力

④自ら率先してそのマイナマを売り、より良いマイナマをつくりあげる力

⑤自ら率先してそのマイナマを売り、より良いマイナマをつくりあげる力

大いなるミスマッチ

「考えても、それほど知識がない、時点から仮説をもち、疑問点について質問を繰り返しながら検証する方法は、必要性が唱えられている割には実践されていない。」

⑥代案のない批判、素直な実行は先送り、実施後のフォローや軌道修正はほとんどなく、成果に結びつかない

それが、現在の日本の大部分の状況ではないだろうか。

人材の開発は、成果が出るまでかなりの時間がかかることを考えると、こうした日本の今の状況には危機感を持つべきを得ない。

身近な一歩から

では、希望はまったくないのだろうか。

6月29日に東京で開かれたGIEE(S)グローバル・イノベーション・エコシステム(2007) (http://www.gies2007.com)での議論から、いくつかの力を開発する上で、多様な原体験を頻度多く受けることが

が鍵であるというヒントを得た。私が最近実施したワークショップでも、初対面で最初はなかなか意見をいわない若手ビジネスパーソンも、例えば新聞のエッセイやコラムをその場で読んで「好きか、嫌い」か「賛成か、反対か」など自分の意見を話しあう場をつくれば、沈黙していた場の雰囲気が一変し、活気あふれるものになることを痛感した。参加者が「もつてみるとみんなに簡単な」「みんなの意見が違」「相手が反応してくわるとライ」がどんどん出る「ことなどを「実感し、自分でもできる」「自信を持つ」わけである。

教育者などの大々的な制度改革も必要だが、その気になれば身近なところから材料はいくらでも転がっている。こうした原体験を積み重ねるほど、レパートリーが増え、どんな状況でもつづいた力を使えるようになる。世界と日本の基盤のギャップを埋めるのは、こうした身近な一歩から始まる。